双剣の魔法使いの復讐者

クロザトウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
双剣の魔法使いの復讐者

【Ｎコード】
Ｎ０９２０ＢＡ

【作者名】
クロザトウ

【あらすじ】
傷だらけで倒れていた青年。
過去の自分も思い出せず、これからどうしていいか解らない。
そんな彼を助けてくれた少女＞アリサ＜
少女の村を山賊が襲う。
復讐のために強くなっていく青年の物語。

0話　逃走者（前書き）

小説を書くのは初めてなので至らぬ点もあると思いますが、温かい目で見てください。

0話　逃走者

序章　逃走者

ザーーーーーザーーーーーー

大雨が降っていた。
深い森の中、すべての音を掻き消す雨音だけが聞こえる。

深夜の暗闇、わずかな月明かりの中に影がよぎる。
一人の若い男が森の中を全力で走っていた。
木々の間を器用に走り抜けている。
ハァハァ

もう長い時間走り続けているのだろう。
目に見えて疲労の色が濃い。
荒い吐息、蒼白の顔色、今にも倒れこみそうである。
赤と黒の上品な服がずぶぬれになり、走りにくそうだ。
それでも、限界以上の力を振り絞って走っている。
ハァハァ

周りに生い茂る草木を完全に避ける事ができない。
手や足に細かい傷が増えていく。

目の高さにある枝を右手で払いのけたそのとき、泥に踵まで沈み込む。
足が取られそうになるが咄嗟に左手を地面について、バランスをとって走り続けている。
この雨のせいで２ｍ先は見えない。それなのに突然の障害を持ち前

の運動神経でこなしていく青年のポテンシャルは高いといえるだろう。
ハァハァ

もうどれぐらい走っただろうか。
1時間ぐらい走ったかもしれない。
（生キル、死ネナイ・・・）
とても冷静な判断が出来る状態ではなかった。
ただ、今までで感じたことの無いほどの生きることへの執着心がわいてくる。
体が休息を激しく訴える。
それをねじ伏せて走った。

追っ手を確認のため振り返ろうとするが、
後ろを振り返れない。
その瞬間後ろからおってくる者つかまってしまう。
そんな錯覚がぬぐいきれない。
ハァハァ

傷だらけで走る。
どこに向かってるかなんて考えていない。

今はただ後ろから追ってくるものとの距離が少しでも離れられたらそれでいい。
ハァハァ

息が苦しい、
でも止まれない。
追いつかれたら助からない。
今の自分には何もかもが足り無すぎる。

いま、生きるには逃げるしかない。
ハァハァ

また、足が泥に取られる。
こらえようとするが今度は体勢が悪い。
体が崩れる。
下り坂を転げ落ちる。
止まらない。

そこへ、森が途切れた。
身長ほどの段差に放り出される。

そこは川原になっていた。
目の前に大きな石がある。
疲れきった体では受身も取れなかった。
転げ落ちる勢いのまま、石に頭をぶつける。
倒れ付したまま、辺りの様子に気を配る。
雨が降っている。
それ以外何も聞こえない。
どうやら追っ手をまいたみたいだ。
（…イキルンダ……）
わずかに生まれた安心感と
限界を超えて酷使した手足はもう言うことを聞いてくれない。
（…イキル…ソシテ…　必ズ…　復讐してヤル……）

そのまま意識は闇の中に吸い込まれていった。

1話　出会い（1）

1章　盗賊狩り
1－1．出会い（1）

目が覚める。
（ここは……．？）
意識がぼんやりとしており、覚醒していない。

（水……）
周りの状況がつかめない。
それよりも今はただ水がほしいと喉が訴える。

手足は鉛にでもなったかのように重く動けない。
ひきつるようなのどの痛みが襲ってくる。
（水……）
口に出そうとしてかすれて声にならなかった。

青年が口をパクパクとさせていると、口に湿った布が当てられる。
手つきには優しさといたわりが満ち溢れていた。
薄暗い視界の中で目だけを動かす。

横に座る少女が美しい指で布を持っている。
器ではなく布なのは青年が衰弱を考慮してのことだろう。

しかし足りない。
そんな青年の気持ちに気づいたのか今度は器に入った水が近づけられる。
「飲めますか」

少女の優しい声が聞こえる。
小さく首を縦にふる。
口に水を運んでもらう。

こぼれる。
うまく飲めない。
ゴホゴホ……
水すら飲めないほど、体が衰弱していた。

こぼれた水を拭き取ってくれた少女は器を自身の小さな口に当てる。

「ンゥ……」
青年の口にやわらかい感触が生まれる。
暖かい水がゆっくりとしみこんでくる。

少女が口移しで飲ませてくれていた。
乾いた体が癒されていく。
とてもおいしい。
青年の目から涙がこぼれる。
生きている。
ただそれがものすごくうれしい。

水を得て落ち着いたのか青年はまた、眠りへ落ちていった。

2話　出会い（2）

1章　盗賊狩り
1－2．出会い（2）

朝日がさしこむ。

「……」
ゆっくりと意識が覚醒していった。

青年は木造の建屋の床に毛布を布団にして眠っていた。

「あ！気が付きましたか」
青年の横に座っていた少女がうれしそうに覗き込んできた。

女の子？？
布団から体を起こそうとする。

「う・・・」
体に激痛が走る。

「まだ、動いちゃだめです。」
少女は慌てて青年の肩に手を当てて寝かしつける。
それから傷の具合を確かめるためか、体のあちこちをさすり始める。
頭と左胸が痛むのを確認すると少女はゆっくりと眼を閉じ、包帯の上から手を当てる。
暖かい光が生まれ、痛みが引いていく。

「これは…・・」

「未熟ですけど治癒魔法です。」
青年は驚いて頭と左胸を何度も触るが、
ほとんどの痛みが引いていた。
「治癒魔法は意識が無いと効きにくいので・・・大丈夫ですか」
少女が心配そうなまなざしで聞いてくる。
青年は自分でも他に体の異常が無いか、体のあちこちに手を当ててみる。
特に痛む場所は無かった。
「君は・・・」
体を起こし、少女に問いかける。
今度は特に痛みも無く起き上がることが出来た。
青年はぼやける思考を何とか覚醒させつつ現状を確認し始める。
取り目の前の少女はいったい誰なのだ。
「私はアリサっていいます。」
アリサは手を合わせてはにかみながら自己紹介をしてくれた。
少女をよく見ると、かわいらしい15，16歳ほどの少女である。
髪型は肩まで届く茶髪をまとめて縛っており、
服装はやや使い古しているが前を打ち合せる長衣で細い布で衣装を押さえる白の民族衣装を纏っていた。
「ここは・・・」
「テンサ村です。」
「川原で血を流して倒れていたんですよ」

「…助けてくれたのか」

「運がよかったです。あのまま1日倒れていたらモンスターに食べられてました」

どうやらよほど危険な状況であったらしい。

「ありがとう」

青年は深々と頭を下げた。

アリサは年上から頭を下げられるのに慣れていないのか驚いて何度も頭を下げていた。

「それで、あなたのお名前は？」

青年は自分がまだ自己紹介もしていないことにはじめて気が付いた。

「俺は・・・」

「俺は・・・誰だ・・・」

自分の名前が思い出せない。

それだけではない、自分が今までどこにいたか、

何をしていたか、記憶からまるっきり抜け落ちていた。

「え・・・・？」

アリサは不思議そうに首をかしげた。

「ダメだ。思い出せない」

両手で頭を抱え込む。

自分の過去がわからないことに底知れない不安がこみ上げてきた。

青年のその様子にアリサは動揺した。

「御婆ちゃん！お父さん！早く来て」
アリサはあわてて扉に向かって声を掛けた。

少しして扉が開いた。
「おお、起きたのかい。傷の具合はどうだい」

腰の曲がった1人の老婆が入ってきた。
アリサと似た茶色の服を着ており、方からは獣の毛皮を掛けていた。

アリサは青年に記憶が無いことをあわてて説明する。
アリサとは対照的に老婆ゆっくりとうなずき、目を閉じ考え込む。

「まぁ、今はゆっくりと傷を治すことじゃな」
目を開けた老婆は穏やかな口調で諭すようにいった。

確かに病人の前では周囲があわてると本人も不安にかられるものである。
そういった意味で老婆の態度は安心感を与えた。

「しかしぃ、名前が無いと不便じゃ……そうじゃのぉ……．．テンロウ…
自分の名前を思い出すまでテンロウと名乗るがええ」

「テンロウさん？」
アリサは何度か口の中で繰り返し読んでみて、にっこり微笑む。
どうやら気に入ったようだ。

「わかりました」
特に反対する理由も無かったので、青年は新しい名前、新しい自分

を受け入れる。
それだけで心が少し軽くなったような気がする。

ぐぅ・・・
そんな時テンロウの腹の音が響いた。

「どうやら食事にしたほうが良いようじゃな。おきられるかい。」
先ほどの治癒魔法のおかげか特に問題なく立ち上がることが出来た。

老婆の後についてゆき、扉をくぐると、ちょうど朝飯が出来ているようである。
しかし、ここに来てようやく意識が覚醒してきたテンロウは自分の状況が恵まれすぎていることに戸惑う。
川原に倒れていた見知らぬ、村の者でさえない男を治療し、食事までご馳走する。
こういったことが一般常識かというとそうではない。
普通なら金目のものを剥ぎ取ってポイ捨てである。
この好意には何か裏が有るのではと、つい勘ぐってしまう。

「遠慮なんかせんでいい。」

老婆は豪快な笑顔を作り囲炉裏を囲む敷物に腰をおろす。

少し躊躇はしたが何も無い今の自分にはその好意にすがるしか無く、テンロウもその後に続いた。

3話　出会い（3）

1章　盗賊狩り
1－3　出会い（3）

隣の部屋には囲炉裏を囲む形で4つの敷物が置かれていた。
囲炉裏には鉄釜があり、食欲をそそるいい匂いが漂っている。

「あれ、お父さんは・・・？」
アリサはそこにいるはずの父をさがして、きょろきょろとあたりを見ている。

う・・・小動物みたいでかわいい。
アリサを見ていると妹を守ってやりたいような保護欲が駆り立てられる。
まあ実際助けられたのは自分だが…

「ああ、先ほど村の蔵に何かあったらしくてのぉ、そちらに向かったわい」
「泥棒？」
「その確認じゃな」

囲炉裏の周りに座り、食事の盛り付けを勧めながら2人は慣れた手つきでとりわけていく。
テンロウも開いている席の1つに座ろうと向かっていく途中、棚の上に置かれた
手鏡を見つけた。
鏡を覗き込む。

自分の顔がわからないというのも不思議だ。
鏡の中には２０歳ほどの男の顔があった。
何かしらの格闘技をしていたのか鍛えられており、１８０ｃｍほどの背丈、目鼻立ちも悪くない。
贔屓目に見れば2枚目に見えないこともない。
ただそれよりも気になったのは、左目の瞳孔が薄い緑色に見えたからだ。
アリサも老婆も目の色は黒である。
これは自分を知る手がかりになるのではないのだろうか。
テンロウが考え込んでいると、囲炉裏の前で待っている2人に気づき急いで席に着いた。

食事をしながらアリサたちのことについて教えてもらった。
脳みそ空っぽの自分にはその辺りでは会話にならんのだ。

アリサの使った治癒魔法は素質が必要らしい。
治癒魔法は家系の影響が強く、サリアの母も使えるとのこと。
特殊な才能なため、都では高く雇ってくれる職種であり、引く手あまたのようである。
目安として１００人の村には１人、１０００人の町には１０人の割合で治癒術士がいることから１００人に１人の才能といわれている。
この才能は出来ない人にはどんなに訓練しても出来ないらしい。
まあ、その才能もピンキリらしいが。

アリサの母は出稼ぎに都に行っていて、今は婆さんと父とアリサの３人暮らしだそうだ。

食事をあらかた食べ終えたころ、扉から1人の男が入ってきた。

「おう、今帰ったぞ！」

「お父さん、お帰りなさい」

アリサの笑顔が向けられる。

そこには、袖の無い着物からがっしりとした筋肉質の腕がみえる男が斧を肩に担いでいる。

髪は短く、３０歳半ばだろうか。ボスとか親方とかオヤッさんなんて言葉がよく似合いそうである。

アリサの父は囲炉裏にテンロウがいるのを見つける。

「なんだ、起きたのか」

「ご迷惑お掛けしています」

「いいって、気にすんなよ。困ったときはってやつだ。

俺はイワサ宜しくな」

豪快に笑いながらイワサは食事を取り始めた。

その間に記憶の無いこと、テンロウと名づけてもらったこと、これまでの事情を説明した。

そして食事が終わった頃

「蔵のほうは？」

老婆は報告が無いことにため息をつきつつ、事態の説明を促した。

「それがよぉ。蔵の鍵は壊されてちゃいたがとくになぁんも取られてなかったよ。」

何も取られていないことがわかったことで安心しているのかイワサは能天気に答える。

老婆は、この事態をどう解釈していいのかと考えているようである。

「きっと取ろうとしたやつも何も無さ過ぎてあきれて帰ったんだよ」
「だといいんじゃが」

二人は不可解な事件に推測を立て始めた。

「御婆ちゃんは村長なんです。」
アリサは話し合う2人を他所にテンロウに話しかけた。
確かに村長だけ合って婆さんの服の作りはイワサやアリサの服よりも装飾が民芸的にこっている。

「それより、これからどうするんだ」
鍵が壊された件に関して推論しつくしたのかイワサが気軽に尋ねてきた。
テンロウはどうするか考えてみたが、そもそも何をしていて、何をする予定だったのか
判らないのだ。答えられるはずがない。

「…わかりません…」
申し訳なさそうに目を伏せながら答えた。
イワサはその答えを可能性の1つとして考えていたのだろう。
特に驚いた様子も無く聞いている。

「もし、すぐに行く宛てを決められないのであれば、しばらくここに止まっていくがええ。幸い今は収穫期で人手はいくらあってもあらんからのぉ」
「そうですよ。遠慮しないでください。」

老婆とアリサが救いの手を差し伸べてくれる。
テンロウは今の状況をもう一度思い浮かべる。
自分には記憶が無い。

行く当ても無い。
この村の名前を知らなかったし、他の村や町の名前を思い浮かべられるわけでもない。
このまま目的も無く村を出ても行き倒れてしまうだろう。
それに聞いた話ではここの領主は税が他の領主よりも厳しく無く、自分が居てもアリサたちに家計がさほど圧迫しないようだ。
それならば少しの間世話になり、収穫を手伝いながら、行く宛を決めてから出ても問題ないはずだ。
アリサたちに感謝しつつ、しばらく厄介になることにした。

「それじゃ、アリサ、村を案内しておあげ」

婆さんに進められ、テンロウは食事で活力の戻った体で立ち上がった。
ずっと一人っ子だったアリサはまるで兄が出来たようでうれしそうについていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0920ba/

双剣の魔法使いの復讐者

2012年1月14日11時45分発行